

◆【海員随想】 シイラ再び① 井上康平

船を取り巻く状況は景気の後退によって一転し、セメント業界の末端に身を置くわれわれも、親会社の合併、グループ化の渦にのまれ、生き残りをかけた経費削減、少数定員による能率運航を余儀なくされた。その上、未組織船を有するライバル会社との競合のために、遅滞なき予定の消化が至上命令となった。それと引き換えに現場からはゆとりが消え、スリム化した船内は濁いた無機質の空間へと姿を変えようとしている

それでもわれわれは須崎を拠点にしたピストン航海の中で、細々と曳き縄を流しカツオやシイラを釣り続けてきた。魚がカブラ（疑似餌）に飛びつき針にかかった瞬間、ショック止めのチューブが伸びきりラインが張る。ウイングから当直明けで寝ている者の迷惑もかえりみずダッシュする。そして無我夢中でラインを手繰り寄せる。潜ったり跳ねたりする魚を見ながら、運だけが頼りのわずかな時間に我を忘れる。

積荷満載時の速力12ノット、魚が食いついてもスピードを落とすことなく走り続ける。ゲットできる確率は低く、魚のあごだけが針に付いてきたりもする。でも、この粗く豪快な釣りの前では頭の中が真っ白になり、ノイズは消え、全身がリセット状態になる。一度、体感すれば体が興奮を忘れることはまずない。

2001年夏、本船に乗船しての荷役室で「今年はまだシイラの顔を拝んでいない」という話になり、船体が波を切った泡の外まで竿を出して釣果を上げようということになった。そのとき、僕の頭の中にはNHKの番組「プロジェクトX」の主題歌「地上の星」が流れ、理由もなく血が騒いでいた。

すぐに船長がシステム全般を設計し、一機士が施工した可動式竿固定装置の試作品が完成した。竹は他の乗組員が「まむし注意」の看板を横目に山へ入り、藪蛇と格闘しながら切り出してきた。

両舷にセットされた長い竹竿には、最後に元漁師の細かい擬装が施され、振り出しと収納が楽にできる作品に仕上がった。両舷に張り出した竿を見て

「航海中にすれ違う船から、お前ら漁師か！ と指さされるぞ」とだれかが言い

「こんなことしている中型セメント船はほかにいないだろう」とみんなが笑った。

その日から竹竿が予想以上の威力を発揮し、苦手になっていた土佐沖のシイラウケさえ釣れるようになった。今までは不漁の理由をスピード？ エンジンの振動？ ナイロンの太さ？ 釣り針？ が原因などとかんかんがくがく論じてきたが、今回の挑戦がそのグレーな部分を木々端みじんに吹き飛ばすような釣果だった。

そして、夏も本番に入ると大王崎沖に巨大な敵が出現し、ヒットしても水面に姿を現すことなく道具を持っていかれることが多くなった。

「海員だより」